

『金閣寺』論

—金閣寺の構造と美の概念—

はじめに

三島由紀夫『金閣寺』は、一九五六（昭和三一）年一月から一〇月まで「新潮」に連載された中篇小説である。その後、新潮社から同年一〇月に限定版『金閣寺』が刊行された。『金閣寺』はその内容を、一九七〇年七月二日に起きた金閣寺放火事件に依っている。そのため、『金閣寺』は連載当初から注目されており、数々の批評や研究が現在に至るまでなされている。それらの特徴として、やはり三島自身の芸術と生の問題とを交えて論じられているものが非常に多いことは確かである。作品構造を読み解き、その後の作品論の基盤となった三好行雄氏による「背徳の倫理—『金閣寺』三島由紀夫」（『作品論の試み』至文堂 一九六七・六）が発表された後、作家論的傾向は、いったんは文体批評や作品論におされた。しかし、結局は作家論的傾向は消えることなく、むしろ現在に至るまでに根強く残った。特に、村松剛氏『三島由紀夫の世界』（新潮社 一九九〇・九）が再び作家への関心が高まるきっかけとなり、現在もこの形式で論じられたものが多くある。

本論文では第一に、同時代評で平野謙氏が指摘されているように⁽¹⁾、

田代あゆ

『金閣寺』が実際の事件を素材にしながらも、結末に至るまでの過程の登場人物等の創作性が非常に高いこと、さらに、子どもが父母から受ける様々な影響をどのように克服するかという、普遍的なテーマを抱えた文学作品であると評価する。そして先行研究が三島の実人生やその性質に依る傾向のあることから脱却することを目指している。

その上で、「普遍的な」一青年である「私」が、父母から受けた外的影響の内容を明らかにし、それが女性・老師との関係にどのように影響したのかを、金閣寺の三層構造と絡め分析する。さらに、その金閣寺を統括する美とは何を指しているのかを明らかにすることを目的とする。

一 金閣寺の構造と意味

はじめに、実際の金閣寺と『金閣寺』の中の金閣寺、さらに心象の金閣寺の構造をそれぞれ比較していきたい。

この時代を代表する建築が、応永五年（一三九八）に義満が北山殿に建てた舍利殿（金閣 一九五五再建）である。このよう

な楼閣建築は鎌倉時代の禅宗寺院に起源があり、多元的ものの並立を志向する時代精神を背景にして、上から禅宗様仏堂風、和様仏堂風、寝殿造住宅風と異なる様式を積み重ね、各部に折衷様の手法が用いられている。²⁾

このように、実際の金閣寺は上から異なる様式の三層構造となっていることがわかる。順に、中国の様式、日本の様式、そして京都の貴族住宅様式といった造りである。

次に、『金閣寺』の中の金閣寺の構造を見る。

金閣はひろい苑池（鏡湖池）にのぞむ三層の楼閣建築で、一九八八年（応永五年）ごろ出来上がったものと思われる。一・二層は寝殿造風につくり、部度を用いてあるが、第三層は方三間の純然たる禅堂仏堂風につくり、中央を棧唐戸、左右を花頭窓としてゐる。また、池にのぞんで、切妻屋根の釣殿（漱清）を突出させ、全体の単調を破つてゐる。

引用は第一章にある金閣寺を具体的に描写している部分だ。説明では、金閣寺は一・二層が寝殿造風、三層が禅堂仏堂風の三層構造となっており、実際の金閣寺とは異なった構造になっていることがわかる。三島は『金閣寺』執筆の際に、現地へ足を運び、風景を詳細にスケッチするなど、その現実を創作ノートに記録している。³⁾その上での構造の差異は、明らかに何らかの意図をもって作り出されたと考えられる。

さらに、心象の金閣寺については、第二章において次のような描

写がされている。

私には金閣そのものも、時間の海をわたつてきた美しい船のやうに思はれた。美術書が語っているその「壁の少ない、吹きぬきの建築」は、船の構造を空想させ、この複雑な三層の屋形船が臨んでいる池は、海の象徴を思はせた。

このように、心象の金閣寺も「複雑な三層の屋形船」と表現されており、現実・心象どちらにおいてもその構造は三層で確かである。このようにみていくと、この作品において「三層」にはそれぞれ、何らかの意味が含まれていると推察することができる。

では、その意味とは何だろうか。考察の前に、『金閣寺』の中でのもう一つ、大きく三つに分けることができるものがあることを指摘したい。それは、登場人物である。具体的には、父母・「私」と関係する女・老師だ。彼らは順に初層・二層・三層にそれぞれ重なることができる。層の順を考える際には、鏡湖池との位置関係を基準とする。なぜなら、鏡湖池はテキスト内で「海の象徴」とされているからだ。三島文学における海は周知のように、生死、すべての根源であると指摘されている。そのため、「私」という存在を生み出した父母が、最も「海の象徴」に近い初層に重ねられるのである。続いて、第二層に関係する女が重ねられる。女は母という生命を生み出す存在だからだ。第三層は、老師が男であるということの他に、意図的にそこだけ仏堂風と改変されていることを考慮すれば妥当であろう。

二 登場人物と「私」との関係

さて、これらを踏まえて次に考察するのは、「私」と各層に割り当てられた人物との関係である。そのためにはまず、「私」がどのような人物であるのかを明確にしたい。

「私」は、生来の吃りである。そしてそれは「私と外界とのあいひだに一つの障碍を置」いてしまう大きなコンプレックスでもある。外界とスムーズに繋がることができない「私」は、空想によって内面を富ませ、「この世のどこかに、まだ私自身の知らない使命が私を待っているやうな気」持ちを抱くようになる。しかし、それと同時に次のような考えも持っている。

人に劣つてゐる能力を、他の能力で補填して、それで以て人に抜きん出ようなどといふ衝動が、私には欠けてゐたのである。
(略) 人に理解されないといふことが唯一の矜りになつてゐた。

つまり、「私」の中には、①外界へといつかは繋がることのできるという希望と、②外界からの孤立が唯一の矜りであるという、外界に対する矛盾した二つの姿勢があるのだ。

また、「私」は外界での自分の立場を自覚している。それは、テクスト第一章の「二挿話」で、「私」が海軍機関学校へ誘われた際に「入りません。僕は坊主になるんです」と、常ならば吃るはずのところを、「咄嗟に明瞭な返事」をしていることから読み取ることができる。この件を機に、「私」は寺の住職になるという、父母によって用意された人生のレールを強く意識するようになったのである。

(1) 父母

それでは、父母と「私」、女たちと「私」、老師と「私」の関係を順に考察していく。先に、それぞれが「私」へどのような影響を与えたのかを簡単に表にまとめる。

初層	父	美の問題 ／ 性の問題
二層	母	性の問題 ／ 職業の問題
	有為子	他人の世界 ／ 恥の立会人 ／ 女性の指標
	娼婦	老師との関係悪化 ／ 流産
	下宿の娘	性行為の失敗 ／ 金閣の出現
	生花の師匠	性行為の失敗 ／ 金閣を憎む ／ 有為子の幻影の集大成
三層	まり子	性行為の成功 ／ 事件の証人に選ばれるがなれない
	老師	未知の存在 ／ 後継ぎ問題

まずは、父母ともに共通している性の問題だ。母が縁者の倉井という男と、父と「私」がすぐ横で寝ている同じ蚊帳の中で不貞を働き、父はそれを見て見ぬふりをしたという事件に依る。「私」は以来母を許すことなく疎ましく思っている。母に対する蔑みや母の容姿の醜さを前面に押し出した語り口は、三島文学での母の描写としては珍しい。醜い女として語られる母は、彼女自身が醜いだけでなく、「私」にも吃音という醜いコンプレックスを与えた存在として認識されており、同じ美から疎外された者として、同族嫌悪を感じているのである。そのため、この後「私」が出会う女たちには、性的でありながらも母性を持ち（乳房の描写が多いことから）、母と

は正反対の美しさを持つ女を求めていくことになる。

またこの事件は、父からも「私」へ大きな影響を残している。元々吃りであることで、通常よりも格段に外界との繋がりを持ち難い状態にある「私」の視界を、父は「掌」で塞いでしまったのである。

「私」が父の「掌」に異様なほどの執着を持つ要因はここにある。父が「私」の視界を奪ったのは、住職という立場から寺の存続を守るためと、家父長制の世の中で、母親の浮気という理由から家族が崩壊することを避けたかったためだと考えられるが、その意図が十三歳の「私」に正しく伝わったか否かは定かではない。少なくとも空想の中で人生を楽しんでいる「私」に、このような現実的な問題を察知し理解する力はなかったと考える方が自然だ。「私」は、閉ざされた世界の中で、父の真意を汲み取ることなく、「律儀な復讐心」を抱いてしまう。

次に父から与えられた美の問題に触れる。「幼時から父は、私によく、金閣のことを語った」「父によれば、金閣ほど美しいものは地上になく、又金閣といふその字面、その音韻から、私の心が描きだした金閣は、途方もないものであつた」という語りからわかるように、父は「私」に美というものを教えた。また、父は死期が迫る中で、「私」と金閣を引き合わせる。「私」と金閣寺の関係はこのようにして、父からはじまったのである。

初層の最後は、母から与えられた職業の問題だ。母は父が死に、「私」が鹿苑寺の徒弟になった後、父の寺を人に譲り、「私」が戻るべき場所を奪う。「私」は、母が自分を辺鄙な岬の寺より規模も何もかもが上の鹿苑寺の住職にしたいという思いで動いていることを知る。「私」はこれを、母の「卑しい野心」だと捉え、ますます母

を醜く感じ、「母があくまで私とは別の世界に住んでいることに気づく。しかし同時に、鹿苑寺の住職になることは即ち、金閣を「私」のものにすることができると考え、「私」の中にも微かな野望が生まれるのである。

この父母から与えられた性の問題と職業の問題は、後々「私」の女性関係や、老師との関係へ広がっていき、大きな影を落としていくことになる。

(2) 女たち

続いて、第二層の女たちと「私」の関係を考察する。女たちは、有為子が一つの基準となり二分化される。「私」が有為子の影を感じた女は、娼婦・下宿の娘・生花の師匠だ。そしてまり子のみ、有為子が「不在」だ。第一に、有為子が「私」に与えた影響を考え、その上で女たちに共通するものを明らかにする。

有為子は、第一章の「私」の回想「悲劇的な事件」で登場する、叔父の家から二件隔てた家にいる「美しい娘」である。「私」は、「悲劇的な事件」を通じて、「人生に、官能に、裏切りに、憎しみと愛に、あらゆるものに」一挙に直面することになる。有為子は美しいながらも孤高の存在であった。また、「私」にとつて、聖母のような存在ではなく、性的魅力をも備えた女性だった。

有為子を空想する「私」は、空想のままに容易に外界と接触することができるといふような幻想を抱いていた。しかしそれは有為子の「何よ。へんな真似をして。吃りのくせに」という言葉で壊される。この時を境に、「私」は「他人の世界」というものを認識するようになるのだ。そして有為子は、「私」に改めて自身が外界への

道を閉ざされた人間であることを思い知らせたことから、「私の恥の立会人」となる。

それから二ヶ月後、彼女は脱走兵を匿ったために憲兵に捕まり死ぬことになる。このとき有為子は妊娠していた。「私」は捕まった有為子が「世界を拒ん」だ顔を美しいと思う。「私」は世界に拒まれることはあっても、自らが拒むことはできないのだ。しかし、死ぬ間際に有為子は脱走兵への「愛慾の秩序に身を屈し、一人の男のための女に身を落とす」てしまう。死の瞬間は「私」が美しいと感じた有為子ではなくなってしまった。

まとめると、有為子は「私」にとって、ただ美しいだけではなく性的な象徴であり、同時に「他人の世界」を作り出させた「恥の立会人」でもある。そして、彼女は今後「私」が出会い惹かれる女性たちの指標となる。また、ここで有為子が死の瞬間に美しさを失ったことだけでなく、妊娠しているながらも結局は母になることなく死んだことから、彼女が「私」にとって〈未完成の女〉であるということも指摘しておかなければならない。

さて、このような有為子の特徴を、物語が進むに連れて登場する、「私」が関係を持つ他の女たちと照らし合わせてみる。まず、娼婦は性的な象徴であることと、流産をして母になり損ねたことが共通する。次に、下宿の娘は、失敗には終わったもののやはり「私」にとって初めて実際に女として触れた性的な存在であったこと、その他に「私」に向かってその吃音を正面から指摘したことが、本質的な部分で有為子と共通している。そして、生花の師匠は、「私」が有為子の幻想を抱く女たちの集大成だといえる。最も多くのページが割り当てられている彼女は、その美しさは勿論のこと、戦場へ行

く士官との間に子どもが出来たものの死産に終わり母になり損ねたこと、柏木によって汚された後に「私」と性交渉を持つとうとする、性的な象徴であることなどが共通している。

ではまり子はどうか。彼女は唯一、「私」が有為子は「不在」だと感じた女である。しかし、その為には有為子との共通項がない、とは言えない。彼女もまた商売柄、性的な象徴であることに変わりない。他の女たちとは違い有為子と同じように名前を持っているのもまり子だけである。

また、まり子もまた「私」にとって〈未完成の女〉である。なぜなら、まり子は「私」が唯一、金閣寺に火をつけることを仄めかした人間であるにもかかわらず、それを全く信じずに、「私」のいう事件の「証人」になれなかったからである。性行為こそ成功したもの、有為子が死に際に「私」を裏切ったのと同様に、まり子も「私」の期待する役割を裏切ったのだ。

(3) 老師

最後は第三層の老師と「私」の関係を考察する。老師は死期の迫っていた「私」の父とは対照的に、「動物的」「肉」「桃いろ」というような、非常に肉感的で生々しい印象を与えるように語られている。

ここからは、「私」が抱く本来の老師という立場のあるべき姿との間に矛盾や不満を抱えていると推測できる。「私」は内界を中心に生きているために、自分がイメージすることのできない存在を、まるで奇妙なもののように捉える節がある。老師は理解のできない存在として「私」の目に映り、不快感が「私」の中に蓄積していく。

「私」は、この矛盾は何かより人間らしい部分を隠しているために生じているのではないか、という考えに行き着く。

老師の隠された人間らしい部分を表出させるチャンスは、外国兵が連れてきた娼婦が、「私」に腹を踏まれて流産したという事件の発覚により、意外にも早く訪れる。老師はこの件を直接「私」に聞いたしはしなかった。老師の無言の姿勢は、言葉を使いたくても上手く使うことのできなかった「私」にとつて、不可解に映ったに違いない。このとき「私」ははじめて無言の力に触れたのである。その後「私」は、老師の人間らしい一面、つまり怒りの感情を、悪の行為を行うことで引き出そうと試み始める。明確な欲求は、内界から中々外界へでることのできなかった「私」を動かすことになる。「昭和二十四年の正月」のことである。「私」は「土曜の徐策」で安い映画を見て帰る途中、老師が芸妓の女性を連れているところを目撃してしまい、回避しようとはしたものの結局は会ってしまった。「動揺して、口から言葉が出」ず、「自分でも思ひがけない表情」つまり「老師に向つて笑ひかけ」てしまった「私」に、老師は顔色をかえて叱責をする。

この件の後も流産事件の後と同様に、老師は「私」に無言の姿勢をとるようになる。「私」はそれがどれほど耐えがたい苦痛であるかを既に知っていた。そのために、「私」は、一度思い立った衝動に身を任せ、あの日の芸妓の写真をそつと新聞に挟んで老師へ渡す、という後戻りできないアプローチをしてしまう。結果、「私」は老師の口から直接、鹿苑寺の後継者から外す旨を伝えられるのである。「私」は老師に仕掛けた悪の行為によって、老師の人間らしい一面をみることができたと思う。しかし、実は老師はまったく憎しみ

や恨みというような面からは切り離されていることを、「私」は認識することになる。「老師は私のことを隅々まで知つておられます。私も老師のことを知つておるつもりでございます」という「私」の言葉に対して、老師は「知つておるのがどうした」「何にもならんことぢや。益もない事ぢや」と答えるのである。老師の本質がまさにここに表れている。それは諦観である。空想の中で独りよがり生きる「私」には到底理解できないものであった。つまり、老師とは「私」にとつて未知そのものだったのだ。「私」は、本能的に今は老師と距離をとった方がいいと判断し、柏木に金を借りて寺を出奔する。

老師が「私」に与える影響はこのような精神的な面だけではなく、寺の後継者として「私」を選ぶのかという現実的な問題もあることを忘れてはいけない。無論、この問題も無論精神面に深く連動しているが、「私」は父母、特に母親から現実的な期待をかけられていた状態なので、まさにそれを近々の問題として意識しなければならなかった。たとえば、老師の精神的影響から逃れて、女を経験することとで一人の人間として人生に歩みでることができたとしても、歩み出た先の人生が「私」の意志ではなく、父母や老師によって定められたものならば、真の意味で「私」が「私」の人生を生きているということにはならないのだ。「私」は老師の無力を認識した後、寺を出奔しその出奔先で『金閣を焼かねばならぬ』という思いに至る。それは「私」が、漸く現実的にも精神的にも「私」を縛っていた金閣というものと正面から向かい合い、そこから脱却しようという決意からくるものであった。

四 金閣寺の美の概念

ここで一度考察をまとめたい。各層ずつの性質や共通項を考察した結果、第一層の父母から与えられた精神的・現実的影響が、第二層の女(性の問題)・第三層の老師(後継ぎ問題)へと広がっていき、それぞれの層が独立した意味をもちながらも、「私」という人間を要にしてまさに「複雑な三層」の造りになっていることが指摘できる。

また、三層すべてが、「私」の内界だけで培ってきた認識では理解の及ばない対象であり、特に女は「私」の理想像には敵わない未完成な存在、老師は遠く認識の及ばない未知の存在の象徴として位置づけられている。父母に関しては、それぞれが「私」にとつて許しがたい対象であり、そういった意味で同じく、理解しがたい対象であることが指摘できる。つまり、金閣寺の構造は、「私」にとつては非常に不確かで、不完全さが残るものが寄せ集められ、精神的にも現実的にも私を縛りつけるような形を成しているといえるのである。

それらをすべて括りこんで頂点にあるものは美であると、「私」自身がテクスト第十章の、金閣寺を燃やす直前に理解している。「私」は人生からだけでなく、美からも疎外された人間だ。そんな「私」が金閣寺(現実・心象)を語る際には必ずこの美という言葉を使う。では「私」の人生を阻むものの、そのすべてを統括するものであるという美とは、一体何を指しているのだろうか。

『金閣寺』における美の問題は、既に様々な論が出されているのは、田坂昂氏は「金閣寺」(56年)をつらぬく主題をなしているのは、

存在論の意味をおびてあらわれてくる「美」という難問をめぐる主人公の内面の葛藤である。⁽⁴⁾と、美の問題を位置づけ、光栄堯夫氏は「金閣」は美のトータルな存在」と述べ、それを中心にした「金閣寺」には、芸術家にとつて行為とは何か、またそれは可能かという指定が隠されている」と指摘し、美と芸術家の問題として位置づけている。さらには、山崎義光氏のように、三島が「美」のイメージの図式の反復」を繰り返すことによって、美が、手記というこの作品の構造と、読者との関係においてアレゴリーという役割を果たしていると論じているものもある。⁽⁶⁾

このように、『金閣寺』における美の問題は、様々な解釈を持たれてきており、「私」を普遍的な一青年であると位置づける本論においても、美の正体を明らかにしなければならぬのである。そこで、まず美の描写に共通するものを明らかにし、さらに共通するものから導き出される美の概念を考察していきたい。

まずは美の描写に共通するものを、本文の「私」の語りから引用しよう。

美とは小さくも大きくもなく、適度なものだといふ考えが、少年の私にはなかつた。そこで小さな夏の花を見て、それが朝露に濡れておぼろげな光りを放っているやうに見へるとき、金閣のやうに美しい、と私は思った。また雲が山のむこうに立ちだかり、雷を含んで暗澹としたその縁だけを、金色にかがやかせているのを見るときも、こんな壮大さが金閣を思はせた。はては、美しい人の顔を見ても、心の中で「金閣のやうに美しい」と形容するまでになった。

「第一章 傍線引用者 以下同じ」

金閣はいたるところに現はれ、しかもそれが現実に見えない点では、この土地における海とよく似ていた。舞鶴湾は志楽村の西方一里半に位置していたが、海は山に遮られて見へなかつた。しかしこの土地には、いつも海の予感のやうなものが漂っていた。

「第一章」

金閣は暗黒時代の象徴として作られたのだつた。そこで私の夢想の金閣は、その周囲に押しよせている闇の背景を必要とした。

「第一章」

戦乱と不安、多くの屍と夥しい血が、金閣の美を富ますのは自然であつた。

「第二章」

引用からは、金閣＝美であること、人や風景など「私」が感じた美しいものはすべて金閣の中に帰結されることが読み取れる。また、金閣とすべての源である海が似ていると「私」が感じていることも見逃せない。さらに、「不安」や「屍」「血」「闇」も、金閣・美を表わす際に必要とされる。これを踏まえると、敗戦のときに、「私」が金閣の美が最も美しく輝いたと感じた理由がわかるだろう。これらの引用以外にも、「私」が金閣とその美を語る場面は多く、例えば台風之夜に一人で金閣に宿直した日などは、「豪奢な闇」「午後十

一時半ごろ」「月」「鏡湖池」、さらに、鶴川の死を契機に疎遠にしていた柏木と再会する場面でも、夜、月に照らされた金閣寺というシチュエーションで語られている。

「私」の言う美とは金閣であり、金閣とは美である。その二つで一つのものが必要とする存在条件は、「闇」や「不安」といった暗い背景で、それらが語られる時刻は夜が多く、月や風、雨といった自然描写、さらに鏡湖池が用意されていた。鏡湖池はその名の通り、現実の金閣寺から心象の金閣寺を映す鏡の役割を担っており、「海の象徴」でもあることから、「私」や父の故郷を彷彿とさせる役割も担っている。すると「私」が金閣・美の核心に近づいた時に、舞鶴港や由良へ足が向いたのは必然であつたといえる。「私」自らが、美の背景へ入り込むことで、美の正体へ近づこうとしているのだ。

さて、明らかになつた『金閣寺』の美に共通するものの役割は、山崎義光氏が「屍」「血」「闇」や自然など様々な言葉で言い換えることによって、読者が「美」のイメージ図式」をテキストに見ることができ、「物語の発展を支える論理としても機能している」と指摘している。確かに、繰り返し行われる言い換えは、読者にそれが美や金閣に帰結するという図式を刷り込んでいる。

しかしここで最も問題となるのが、これらの言い換えが果たして同一の比重にあるのか否かということだ。私はここでその比重が、ある一つの言葉においてのみ、他のものより重くかけられていることを指摘したい。それは、金閣寺という建築物のその影で、「私」にさまざまな「予感」を感じさせていた鏡湖池である。「月」や「風」「雨」はすべて鏡湖池に投影されたものであるし、金閣でさえ、鏡湖池は現実の金閣寺から心象の金閣寺へ変化させ映し出している。

また、鏡湖池は先ほども述べたように「海の象徴」であり、海は「私」の故郷の海と繋がっている。「私」が現実と心象それぞれの金閣寺から脱却するために金閣寺を焼こうと決意した場所は裏日本海であり、そこで「私」は己の内界と対峙する機会を得ている。こうすることによって、「私」は美・金閣に正面から向き合うことになったのである。ここで、「私」は漸く、まだ鮮明とはいえないものの、美・金閣の輪郭を理解することになるのである。そうして出てきた言葉が、次の引用である。

「美は……」言いさすなり、私は激しく吃つた。埒もなひ考えではあるが、そのとき、私の吃りは私の美の觀念から生じたものではなひかという疑ひが脳裡をよぎつた。「美は……美的なものはおう僕にとつては怨敵なんだ」

美は、長く「私」の内界を魅了していたものであり、美の存在条件は「私」にとつて居心地のよいものであった。美は焼かれるべき対象になった今も、「私」を魅了してやまないため、「怨敵」という強い言葉で表わされている。鏡湖池から繋がった、「私」の故郷の海は、「私」に美を怨敵と認識させるほどの強い力を持っているのである。それは、美が「私」では逆らうことのできない力を持っているのと同じように感じられる。つまり、「私」において、美と鏡湖池が象徴する海は、同質の影響力を持っているのである。また、美や海は「私」に対して「予感」を感じさせる部分でも共通している。突き詰めて言えば、美は海そのものだと思えることができるのである。「私」は、金閣を燃やす直前にはじめて金閣・美の全貌を見るこ

とになる。そのときの状況を「盲人の視力をわがものにしたかのやうだ」と言い、美の在るところが、「思い出の地」であり、「昼とも夜ともつかぬふしぎな時の光の下」であるのならば、それはテクスト第一章の「私」が語る父の故郷「光りのおびただし土地」と重なり、そこにある「海の予感」へと繋がると考えられる。

つまり、既に多くの批評で指摘されているが、「盲人の視力」を得た「私」に見えた美の光景は、間違いなく「私」に美と海（鏡湖池）とが同質のものであったということに気づかせている。そのため、「私」の中でそのすべての源泉である海が、金閣を統括しているものだと置き換えることができ、さらに美が統括する金閣を構成している父母・女・老師の問題を、膨大な水に対抗した火で焼きはらおうと決心したのだと解することができるのである。美の概念が、すべての根源である海ならば、「私」が金閣から脱却するために、戦火を望み、「燃やす」という行為を迷わず選択するのは、実に自然な流れだといえるのである。

おわりに

本稿では、『金閣寺』に描かれる金閣寺が、実在の金閣寺と構造が違うことを発端に、その差異が作者によって故意に「私」に関係する登場人物たちを、金閣寺の三層構造に投影できるように作られたものであることを証明し、さらにそれらすべてを統括する美の正体を明らかにした。まず、三層構造の建築様式を明らかにし、金閣寺と切り離すことのできない、「海の象徴」である鏡湖池を基準に、それらが初層から父母、第二層を女たち、第三層を老師であると位置づけた。そこからさらに、三層構造の基盤となる初層に当てはめ

られた父母が、それぞれ「私」に性の問題・美の問題・職業の問題という、物語の三本柱を打ち立てたことを考察した。「私」は特に、生れながらの吃りであることから、外界との接触が困難であり、幼少期は特に父母の影響が一般よりは色濃く反映されたと考えられる。本来ならば、成長によって父母以外の人間と接触し、様々な考えや価値を取り入れていくはずだった「私」は、吃音によってそれができなかった。そのため、父母から与えられた三つの問題は一つも解決されないまま空想と共に膨らんでいき、確実に「私」と女たちとの間に、「私」と老師との間に介入し、精神的にも現実的にも「私」を縛りつけるようになったのである。

また、このような金閣寺を統括するものを「私」は美と呼んでいた。「私」にとって、金閣とは美そのものであった。金閣・美を語るときに、「私」は「闇」「不安」「月」というような決まったワードを出した。しかし、繰り返し出てくるそれらは鏡湖池に投影されるものでもあり、金閣でさえも鏡湖池に投影され、それは澄明に映ると「私」は感じていた。鏡湖池は「海の象徴」であり、海は「私」や父の故郷の海と繋がっている。海は「私」だけではなく、「私」を取り巻くすべてのものたちの源泉でもある。さらに、「私」がはじめに金閣を焼かねばならないと決意した場所も海であった。このことから、「私」にとって海とは金閣・美と同質の影響力を持った存在であることが読み取れ、美とは即ち、すべての源泉である海である、と言い換えることができるという結論に至ったのである。

註(1) 平野謙「創作合評」(「群像」一九五六・一一)

(2) 太田博太郎・藤井恵介・他『増補新装 カラー版日本建築様式史』(美

術出版社 二〇一〇・三)

(3) 三島由紀夫「金閣寺」創作ノート(『決定版 三島由紀夫全集6』新潮社 二〇〇一・五)

(4) 田坂昴「金閣寺」―美・悪・虚無と人生―(『三島由紀夫論』風濤社 一九七〇・八)

(5) 光栄堯夫「四 行為への序説―『金閣寺』論」(『三島由紀夫論』沖積社 二〇〇〇・一二)

(6) 山崎義光「美(イメージ)」の論理―三島由紀夫『金閣寺』―(『日本文芸論稿』一九九五・二)